

東京オリンピック 全国の花火を一極に集めて聖火台に点灯するとも見て取れる

東京オリンピックの会期は7月24日～8月9日であり、ちょうど全国各地での花火大会の時期とも重なる。新聞記事によると、十分な警備ができないため、この期間の花火大会を中止とする自治体も多いようである。加古川市はかつて花火大会で死亡事故を起こした明石市に近いので、特に中止の決断が早かった可能性もある。

オリンピックの聖火の運ばれるコース、およびそのランナーが最近発表された。これで日本全国の47都道府県を巡るコースおよびタイムスケジュールは明かとなったが、不明な点が残った。それは、オリンピック会場のどの位置にどのような形の聖火台を置くのかということである。メイン会場の材質は木材。口の悪い人は「もらい火で簡単に燃えるよ」などと言っている。

温室ガス排出に関して日本は化石賞などをいただくくらいであるから、目にも止まらぬほどの小さな聖火の炎をメイン会場の中心にとすのも一案かもしれない。多くの批判を受けることは創造されるが、環境に配慮していることを訴えるにはまたとない方法ではないだろうか。グレタ・エルンマン・トゥーンベリなら絶賛してくれることだろう。

(参考) 明石花火大会歩道橋事故 (Wikipedia)

2001年7月20日より明石市大蔵海岸にて第32回明石市民夏まつり花火大会が行われた。開催2日目となる21日の午後8時30分頃、JR神戸線朝霧駅南側の歩道橋において、駅方面からの見物客と会場方面からの見物客とが合流する南端で、1m²あたり13人から15人という異常な混雑となったことから「群衆雪崩」が発生した。死者11名(内訳:10歳未満9名・70歳以上2名)と重軽傷者247名を出す惨事となった。兵庫県警察の警備体制の不備や事故後の対応が問題となり、マスコミでも報じられた。

2019年(令和元年)12月26日 木曜日
 加古川市は25日、毎年8月には約5千発が打ち上げられる加古川河川敷で開催する加古川まつり花火大会を来年に限り中止する、と発表した。7月24日～8月9日に東京五輪があるため、兵庫県警の警察官が東京などへ派遣され、例年と同様の警備態勢は困難と判断した。
 花火は加古川まつりのメインイベントとして、同市と実行委員会が開く。今夏

東京五輪で警備に影響
花火 加古川も中止
 市長「安全確保に不安」

加古川市は25日、毎年8月には約5千発が打ち上げられる加古川河川敷で開催する加古川まつり花火大会を来年に限り中止する、と発表した。7月24日～8月9日に東京五輪があるため、兵庫県警の警察官が東京などへ派遣され、例年と同様の警備態勢は困難と判断した。

川警員ら県警の警察官約360人が雑踏警備や交通規制に当たった。ほかに民間の警備員約740人や市職も多いことなどから断念。岡田康裕市長は「安全確保に不安があり、無理はすべきでない」と話した。

今年8月に開催された加古川まつり花火大会



